

1978/2/15

司牧の分析 (つづき)

- 統治性の考察のための「司牧」の素描
- ・ 牧者と群れの関係；神と人間、主権者と臣民
- ・ 非常に執拗に登場する主題@ヘブライ人／さほどの重要性は見出されていない@ギリシア人
- 牧者と群れの関係はギリシア人にとっては良い政治モデルではなかったのか？
- いくつかの異議（ギリシアで全く司牧的なものがなかったわけではない）

ギリシアの文献や思考における牧者と群れの関係に関する問題 p170, LII

- ギリシア人において、牧者と群れの関係が主権者と臣民・市民との関係を指すものとして存在している
- 1. 『ホメロス』の語彙に見られる例
 - ・ インド-ヨーロッパ語族のあらゆる文献における**主権者の儀礼上の名称**
- 2. ピュタゴラス派の伝承を明白に参照しているテキスト
 - 1) 群れに対して**法をなす牧者の機能**
 - 伝統的に認められてきた語源解釈
 - 食糧を配分し、群れを導き、良い方向を指し示し、どのように羊をかけあわせれば良い仔が生まれるかを言う者であるかぎりにおいて法をなす者
 - 2) 人を愛する者（ピラントロポス）としての**行政官**
 - 牧者同様に熱心さと心遣いにあふれた者で、「管轄下の者たちのために」作られている
- 3. 古典的な政治学の語彙
 - 1) 典型的な東方的イデオロギーであり、ピュタゴラス派の影響を見て取らなければならないもの
 - 2) ピュタゴラス派だけに属するものではなく、古典期の語彙・政治的修辞の常套句
- 牧者の隠喩に非常に近いものはあるが、牧者の隠喩はほとんど見当たらない；牧者の隠喩は稀な隠喩

重大な例外としてのプラトン『政治家』 173 頁, LI

- 良い行政官、理想的な行政官が牧者と見なされているテキストがプラトンには多くある。
 - 『クリティアス』、『国家』、『法律』、『政治家』
- 三通りの用法
- 1. 人類に対する神々の権力の示す特有・十全・幸福な様相を指す用法
 - ・ 神々こそが[人間たちを]養い、導き、食糧を与え、操行の一般的諸原則を与え、幸福と安楽に目を光らせた。
- 2. 行政官についてのテキスト
 - ・ 牧者たる行政官は、ポリスの創設者ともポリスに本質的な法を与えた者ともみなされない≡従属的な行政官
- 3. ピュタゴラス派のテーマ；牧者たる行政官、牧羊としての政治
 - ・ トラシュマコスとの議論
 - 実は牧者は利己主義的なのではないか；獣たちのために辛いことを自らおこなうのはただ、いつの日かその獣たちを犠牲にし、喉を掻き切り、ともかくも売ることができるため
 - ←良い牧者、真の牧者ではない。真の牧者は、「群れのために全面的に献身し、自分のことなど考え

ない者のことだ（ソクラテス）

■ プラトンの『政治家』の議論が標的とするもの

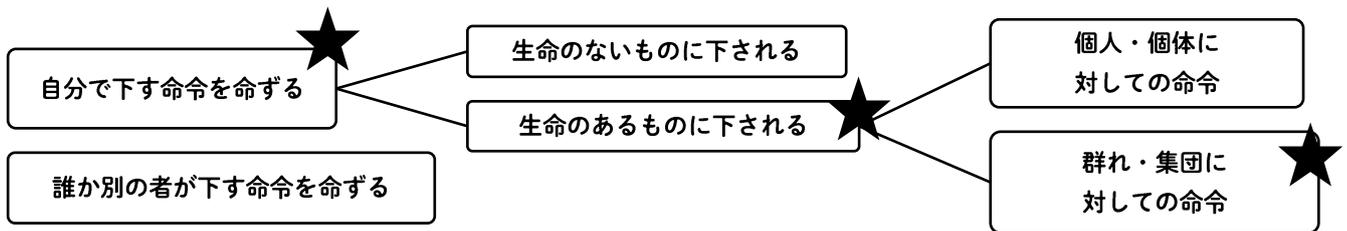
- ・ 政治は実際、牧者と群れの関係というこの形式に対応し得るものなのか？
 - テキスト全体が「否」と回答

→ 政治家を特徴づけるその術・認識とは、命令・指令する術

- ・ 王は命令する。
- ・ 神の命令を伝達する占者、使いの者、議会の審議の結果を運ぶ伝令官、船の漕ぎ手の長も命令する

→ 実際に命令を下すこれらすべての者たちのなかから本当の意味で政治家たる者を見分け、政治に固有の術（行政官の機能に対応するもの）を見分けなければならない。

➤ 命令するということは何なのか



- ・ 群れをなす生きものに対して命令を下すとは何か→その群れの牧者である、ということ。
- 政治家とは人間たちの牧者であり、ポリスの住民によって構成される生き物の群れを見守る牧者である。

■ 「群れの牧者としての政治家」というテーマへの批判

1. 粗雑且つ単純な区分にもとづく方法を再検討する

- 牧者と群れを区分しようとするとき、「行政官＝牧者」という等式を不変と見なしたままになっている。
- 動物たちの類型論は得られるが、この命令するという術は一体内なのかという根本的な問いにおいてはまったく進歩が得られない。

2. 牧者であるとはどのようなことか、を問う

- ・ 牧者であるとは、群れの中であってただ一人の牧者であるということ。
- ・ 牧者はたくさんをしなければならない
 - 人間のポリスに置き換えて考えると、牧者の単独性・単一性の原則が反論される。
 - 王が牧者と定義づけられるなら、農民もパン屋も医師も体操教師も教育家も牧者と主張できる＝政治家の対抗者。
- 政治的機能ではない機能が次から次へと出てきてしまい、ポリスにおいて牧者の活動に関係するあらゆる活動の類型論になってしまう。

3. 政治家の本質自体をどのようにして捉え直せばよいか、を問う。

- ・ 『政治家』の神話；世界がまずは正しい方向に回っているが、その時期が終わりに来ると正反対の方向に回り、困難な時代の運動になるという考え方。
- クロノスの時代（幸福な時代）：
 - あらゆる種の動物がおり、それぞれが群れになっている。
 - 群れの先頭には、牧者（牧者の天才＝神）が一人いる。；その勤めは無限でもあり、網羅的でもあり、容易でもある→政体は不要
- 世界が逆向きに回るとき：
 - 政治が始まる。

- 神々は間接的なしかたでしか人間を助けない（偏在的・無媒介的に存在する牧者ではなくなる）
- 人間たちは互いに導きあうことを余儀なくされる→政治や政治家を必要とする。
- 神々が人類より上位にいたように、他の人間たちの上位にいるわけではなく、彼らは人間たち自身の一部なので、牧者とは見なされえない。

4. 政治家の役割の定義づけ；織物のモデルの提起

- ・ 政治の術は織物工の術と同様、あらゆるものを全面的に引き受けるようなものではない。
 - 羊毛は刈り取られていなければならないし、それが毛糸になっていなければならないし、織物工が働けるように毛梳工が仕事をしていなければならない。
 - 戦争をする、裁判所で良い判決を下す、修辞術によって議会を説得するといったことはすべて、政治固有の事柄ではないが政治の行使の条件である。
- 政治的行動、政治家の本質は、「結びつけるということ」；「融和と友愛にもとづく共同体へと」人々をまとめる術

■ プラトンにおける司牧の理解

- ・ 司牧なるものが存在するとしても、それはあまり重要ではない活動にしか見られないという指摘
- ・ おそらくポリスに必要ではあるが、政治的なものの次元に対しては従属的なものにすぎない活動（医師や農民や体操教師や教育家の活動）
- 司牧は実際、宗教的・教育的な小共同体において機能しうるものであって、ピュタゴラス派はこれにポリス全体という規模で価値をもたせようとするという誤りを犯している。王は牧者ではない。

人間たちの統治のモデルとしての司牧の歴史は西洋においてはキリスト教と切り離せない 182 頁, L6

- ・ ギリシアの古典的な政治学の語彙には牧者というテーマが見当たらない。
- ・ このテーマはプラトンによってはっきりと批判されている。
- 政治に関するギリシアの思考・考察が、牧者というテーマに対する価値づけと相いれない
- 「キリスト教」が司牧という形式を広めることを可能にした
 - 牧者と群れの関係を出発点とする権力の実定的分析が本当にみいだされるのは、大いなる政治思想の側ではなく、小共同体の側

■ 司牧の本当の歴史

- ・ ほぼキリスト教ともに始まる
 - 救済を口実として現実の生において人間たちを日常的に統治し、それを人類規模で行うと主張する宗教
 - 教会として制度化とされて行われる。
- ・ ほかのどこにも見当たらないような権力装置で、紀元後 2, 3 世紀から 18 世紀に至るまで展開・洗練され続けてきた。
- 司牧的権力をめぐり、司牧的権力に関する闘争
 - 人間たちを統治する権利を実際にもっているのは誰か
 - 日常生活において人間たちを統治する権利を実際にもっているのは誰か
 - 誰がこの権力をもっており、その者は誰からそれを受け継ぎ、どのように行使するのか
 - 各人に残されている自律の余白はどのくらいか
 - この権力を行使する者たちの資格はどのようなものか
 - 彼らの権限の限界はどこにあるのか
 - 彼らに抗して使える頼りの綱はどのようなものか

- これこれの者たちがしかじかの者たちに対して及ぼす制御はどのようなものか

■ 司牧の大変な強化

- プロテスタント・タイプは、より仔細な司牧がなされる
- カトリック教会は、中央集権が強化された、位階化されたピラミッドが設けられる
- ・ 司牧的権力の徹底的な再組織化に結びついている
- 封建制に反対する革命はさまざまに起こりはしたが、司牧に反対する革命は決して起こらなかった

■ 司牧の歴史の必要性

- ・ 用いられていた諸技術の歴史、司牧技術についてのさまざまな考察の歴史、司牧技術の発展・適用の歴史、次第になされる洗練の歴史、司牧の行使に結びついている人が誰であるかに関するさまざまなタイプの分析の歴史は、決してされてこなかった。
 - ・ 司牧についてされてきた膨大な考察
 - 法や制度に関する考察としてのみならず、理論的考察、哲学的な価値のある考察として
 - 「術中の術（テクネー・テクノーン）」「知中の知（エピステーメー・エピステーモーン）」→「術中の術（アルス・アルティウム）」「魂の統率（レギメン＝アニマルム）」
 - キリスト教西洋において哲学を引き継いだ
- この術によって、ある人々は他の人々を統治するすべを教わり、他の人々のほうは誰かに統治されるすべを教わった

「魂の統治」のいくつかの特徴 186 頁, L16

- ヘブライにおける司牧
 - 牧者と群れの関係はつまるところ神と人間たちとの多様かつ複合的な、絶え間ない諸関係の見せる様相の一つに過ぎない
 - 厳密な意味での司牧的制度はなかった；ヘブライ社会の内部において、他の人々に対して牧者であるような人は誰もいない；神以外に牧者はいない。
- キリスト教会における司牧
 - 他のテーマから自律化し、神と人間たちの関係を示す単なる一次元・一局面ではなくなる。
 - 根本的・本質的な関係となり、他の関係をすべて包み込む関係になる。
 - それ自体の法・規則・技術・手法を備えた司牧において制度化されるタイプの関係となる。
- **自律的なもの、包括的なもの、特有なもの**
 - ・ 権威に関わる諸関係は教会の上から下に至るまで、群れに対して牧者がもつさまざまな特権と任務によって基礎づけられる。
 - キリスト—使徒—司教…共同体の戦闘に立つ教区司祭は牧者と見なされる
- 司牧制：教会において保持されている諸権力：**群れに対する牧者の権力として組織され、正当化される**
 - 秘蹟の権力、洗礼の権力→羊を群れへ呼ぶ
 - 聖体拝領の権力→精神的な糧を与える、群れを離れた羊を悔悛によって連れ戻す
 - 教会の裁判権→病気や躓きの石によって群れ全体を汚染する可能背のある羊を牧者として群れから追放することを司教に許すもの

- ・ 司牧的権力はキリスト教の全歴史を通じて政治的な権力から判然と分かたれてきた
 - 宗教権力は諸個人の魂をひきうけることだけを務めとしてきたということではない
 - 司牧的権力が諸個人の魂を引き受けるのは、この魂の操行がある介入を含意しているかぎりにおいて
 - 司牧的権力の根本的特徴と逆説
 - 日常的な操行やささまざまな生の管理にたいしてなされる、また財産・富・物事に対してなされる恒常的介入
 - 諸個人を対象とするだけでなく、集団も対象にする
 - 司教は、**諸個人を引き受けるだけでなく、世界全体を引き受けねばならない**

■ フーコーによる二つの指摘

① 司牧的権力は政治的権力と同じようには機能しない

- ・ 教会の司牧的権力と政治的権力のあいだには一連の相互作用・支持関係・中継ぎ関係、一連の衝突があった
- ・ 政治的権力との相互作用があっても、司牧的権力の形式、機能のタイプ、内的テクノロジーは、少なくとも 18 世紀まではまったく特有なもの、政治的権力とは異なるものにとどまっていた

② 司牧的権力と政治的権力の二つのタイプの権力がそれぞれに固有の特徴や相貌を保った

- ・ いかなる相互作用にもかかわらず、司牧的権力の特有性はそのまま残った。
- ・ 牧者は権力を神秘的なしかたで行使する者にとどまり、王は権力を皇帝的なしかたで行使する者にとどまった。

→ キリスト的司牧と皇帝的主権のあいだの区別・異質性は西洋の特徴の一つ

- 東方にはこれと同じものは見当たらない

■ ロシアの伝統の比較

- ・ 君主制のロシア社会にキリストに関係するテーマが生きられ、知覚され、深く感じられている。@アラン・ブザンソン『生け贄にされたロシア皇太子』
- ・ ゴーゴリのテキスト
 - キリスト教的な主権者の素晴らしいイメージ→西洋に特徴的なものではない
- ・ 西洋の主権者はカエサルであって、キリストではない。
- ・ 西洋の牧者はカエサルではなく、キリストである。

内容の整理というか確認

ギリシアにおける司牧制がどう評価されていたのか——牧者と群れの関係は、「牧者の天才＝神」でなければ築くことができない。現実的な意味で牧者を捉えるなら「織物工モデル」で考えざるを得ない→あまり大事な概念にはなりえない、という結論に至っていた。

一方で、キリスト教的発想と司牧的権力の分かちがたい関係性が指摘された。キリストによる「救済」のときがくるまで、「迷える子羊たち」は教会の牧者≡司祭に守ってもらい、かついうことをよく聞いて、お務めに努めるようにと諭されて生きる。このキリストの教えに従う場合は「救済」が約束されるが、そうでない場合は放逐の対象となる。（「救済」の対象が広ければ広いほど、信仰が篤く、牧者を慕っていればいるほど、他の羊に対して規律的になるような気もする。）牧者と群れの関係性がキリスト教における根本的な特徴となっていることも指摘されている。

政治的権力と司牧的権力が区別されていたのは、プラトンが言及したとおり、司牧的権力が政治の役割を果しえないことが分かっていたから？司牧的権力には、政治的権力を握る以上の権力性が秘められていたから？？